

御国が来ますように！！あなたはどちらの国に生きるのか 「失われた者Ⅱ 息子として他人として」

ルカ19：10 ルカ15：25～32

■ 放蕩息子の話（弟の場合）

先週のメッセージでは、放蕩息子・弟から語られました。弟は、義務を放棄し自分の権利を主張して、父から生前分与で財産を受け取り、放蕩の限りを尽くしました。落ちるところまで落ちて彼は「我に返った（17節）」のです。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません（21節）」と言い、自分の権利や息子という立場を見る目線から、義務を放棄し罪を犯していた自分の姿を見て悔い改め、雇い人のさらに下にまでへりくだる目線が与えられたのです。私たちは、この弟の姿を通して自分の悪い部分を知り、失われたものを取り戻すことが語られました。

■ 放蕩息子の話（兄の場合）

しかし、この弟の話聞いても簡単に行くことはできません。自分の悪い部分を認めることが難しいのです。弟が「あなたの子と呼ばれる資格はありません」と言ったように、私たちは天の神さま、父の子であることはよくわかっています。ただし「権利を追求する子」としての目線があるからです。

25節からは、弟が帰って来て父が祝宴を催していることを知った兄の様子が書かれています。この様子を見て兄はおこって、家に入ろうともしませんでした。それは父が出て来て、いろいろなだめてみるほどでした。そして、父に向かって「ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか（29-30節）」と言います。兄の目線は、父子の関係でありながら「仕えさせられていた」ものでした。

兄はいつも父のそばにいて、あらゆる恵みを受けていました。時く種が与えられ、刈り取る恵みも経験できていたことでしょう。ですがそれを「やらされていた」という受け身の意識だったのです。

■ 兄をなだめる父

今回の箇所を振り返っても、兄は恵みを得ています。28節に父が兄を「なだめてみた」とあります。「なだめてみた」はギリシャ語で「バラカレオー」παρκαλέωで未完形です。つまり父は兄を「なだめ続けている」のです。他にも「そばに呼び寄せる、願う、頼む、懇願する、さとし、元気づける、慰める、なだめる」という意味があります。そして、これの名詞は「バラクレートス」παρκαλέητοςで「助け主」と言います。ですから兄は、なだめられているだけではなく、助け主がそばにいてくれるのです。旧約時代の清さの中でしか働けない御霊ではなく、罪の中にいる兄…私たちをも慰め、助け、導いてくれる御霊が存在しているのです。自分の権利や立場にばかり目線が向いている兄は、このような父・神の存在に気づき恵みを受け取ることができていませんでした。

■ 兄に呼びかける父

そんな兄に対して、「なだめた」次にさらに父は31節で「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ」と呼びかけるのです。ここで用いられている「子よ」は「テクノン」τέκνονです。しかし、ルカ15章8回11節、13節、19節、21節（2回）、24節、25節、30節で用いられている「子」には「ヒュイオス」υἱόςが使われています。「テクノン」も「ヒュイオス」も同義ですが、31節で使われた「テクノン」は、より親愛の情をもって呼びかけることばなのです。父は兄に対して、怒って論じたのではなく、親愛の情をもって「息子よ」と呼びかけたのです。

■ 裁き続ける兄の姿から受け取ることは

これだけの愛を注がれ恵みを受けていても、兄は弟を裁き、喜んで迎えた父に怒りました。それは、自分のことを棚に上げ、罪人を見て裁くパリサイ人のようでした。私たちにもこのような目線があります。それは、私たちが父・神の本当の子になれていないからです。神の目から見ると自我に生き本当の子となれていない二人とも放蕩する息子だったのです。しかし、弟は死んでいましたが我に返り、本当の子になることができました。父のそばにいながら自我に生き、本当の息子にならず我を見失い、父・神との関係が壊れて本当に死んでしまっていたのは兄でした。それに気づくバロメーターは権利の主張です。

もしも自分の立場や権利を優先し誰かを裁き始めたら、目線がズレている可能性があります。もしも本当の子として父・神と同じ目線を持ってい

れば、失っていた者（弟）の帰還を父と一緒に喜ぶことができたはずですが。しかしこのたとえ話は「だがおまえの弟は、死んでいたのが生きて返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか（32節）」で終わっています。

弟の変化は書かれています。兄のその後は書かれていません。ただ一つ分かることは「神は決して見捨てない」お方ということです。だから、どんなことがあっても、自我に死んで、自分の罪を見て悔い改め、神の本当の子となり、何度失敗しても挫折を味わったとしても親愛の情をもって「私の子」と呼んでくれる神さまのもとに帰って来ることが大切なのです。

■ ヒゼキヤとマナセから受け取ることは

聖書にはヒゼキヤとマナセという王が出てきます。マナセはヒゼキヤの息子です。ヒゼキヤはいくつかの失敗はありますが、神に従った良王です。ある時、アッシリヤがイスラエルを攻め、イスラエルの神を冒瀆します。このことをヒゼキヤは神に訴えます。するとその夜、神は約束を実行に移され、アッシリヤの陣営で、十八万五千人を打ち殺し、この後、アッシリヤがエルサレムに攻めてくることはなくなりました。ヒゼキヤ王の信仰に応え、神がエルサレムを救われました。一方、マナセは聖書の中でも名高い悪王です。彼は父ヒゼキヤが取り除いた礼拝所を再建し、バアルの祭壇を築き、アシュラ像を作り、わが子を偶像の祭壇にいけにえとし、魔術や占いなど神の目に悪とされることをことごとく行いました。そんなマナセも歴代誌第二33章によれば、アッシリヤによってバビロンに捕囚された後、「主こそ神である事ことを知った」と悔い改め、そして再びエルサレムに帰還して、すべての偶像を撤去していることが記されています。そうして国は再建されたのです。父ヒゼキヤと神との関係を見ていたので本当の神との関係に戻ることができたのです。

■ スティーブン・スコットの人生を通して

スティーブン・スコットという人がいます。彼は仕事をしてすぐクビになり、人生を棒に振っていました。そんな時、アメリカ大成功しているクリスチャンに会うチャンスが与えられました。彼に成功の秘訣をたずねると「自分も失敗ばかりしていた。だから、毎日箴言を読むことにした」とアドバイスを受けました。

箴言の著者はソロモンです。ソロモンが神に近づかなければならないということ学んだ秘訣が書いてあるのが箴言です。それを読むことで、自分が本当はどんな者なのか分かったんだと言われたのです。だからスコットも徹底して箴言を読み、それを行う人生を選んだのです。すると神のことが良く分かり、本当の自分がどんなものなのかを知ることができて、あんなにうまく行かなかった自分の人生がどんどん祝福されるようになったそうです。

ひとりの大失敗者の人生が御言葉によって変えられて、そして世界中の人たちにその生き方の素晴らしさを教えてくれています。私たちが本当の自分を知ることがどれ程大事かということが証されています。

さいごに

私たちに弱い部分もあります。時には自分の権利を行使してしまうこともあります。だからそのために教会があるのです。その時に自分と一緒にいて、そんな私を受け止めてくれている神さまがいるのです。神さまは、私たちを慰め、受け入れ、励まし続け、ずっと遠くから見つめ続けて、最後は十字架にかかって私たちの身代わりとなられたのです。

私たちはこのイエスキリストの十字架を覚えておかなければいけません。心を頑なにしてお子じゃなくと自分が神さまの子だったことを忘れてしまうのです。そうなるとうと、子ではないので、神さまの恵みを相続することがない…奴隷のように働かされ疲れ果てて、「なんで私はこんな目に…」と、見るべき目線が失ってしまうのです。だから私たちは神さまの前に、兄も弟にもならず素直に生きる者、本当の子であることを求めましょう。

（要約者：行司 佳世伝道師）

（2023年8月13日）